



成隣だより

平成27年 1月 8日
第 9 号
昭島市立成隣小学校
校長 長 野 基

佳き年の初めに思うこと

校長 長野 基

新年明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては、さぞお健やかに平成27年、西暦2015年の幕開けを迎えられたこととお慶び申し上げます。

本年も、旧年中と変わらぬご支援とご協力の程どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、私の正月を紹介します。

〔元日〕毎年のことながら、元旦には実家で両親を含めて家族6人でお屠蘇にお雑煮を頂きます。お屠蘇は昼まで続きますが、昼頃休憩を兼ねて近くの稲荷神社に初詣に行きました。

このあたりには40年以上住んでいますが、その神社におみくじがあるのを初めて知り、感動して一つひいてみました。『吉』という結果に満足して、今年一年がさらに明るく見えてきました。帰ってから年賀状の返事を書き、お屠蘇の第2部が夜へと続きました。

〔2日〕朝8時の号砲で107.5km先の箱根に向けてスタートした、大学生の熱き戦いから目が離せません。子供が小さい頃には実際に箱根まで行き、沿道で応援したこともありましたが、もちろん、お屠蘇の2日目は続いています。今年は、何と言っても青山学院大学の“3代目山の神”の出現でした。改めて若者の秘めたる可能性に感動しました。

〔3日〕また朝8時の号砲に注目しました。各大学とも、復路の5人にそれ相応のプレッシャーがかかっていることが、テレビの画面を通して痛いほど伝わってきます。大学創立140周年で初めての往路優勝をした青山学院大学にも、当然プレッシャーがかかっています。結果はご存じのように、青山学院大学が往復とも歴代最高タイムでの優勝。この日は昼に姉一家5人が合流したため、11人が揃って昼からのお屠蘇。さて、大学駅伝で毎年話題になるのが、翌年のシード権争いです。前日第1区で最下位だった山梨学院大学が最終的に9位でゴールしシード権をとったかと思えば、最終走者がたすきを受け取ったときに8位だった中央大学は、その走者が膝の痛みで走れなくなり、なんとか19位でゴール、すぐさま病院に運ばれ絶対安静。普通ならゴールできないような痛みだったのに、母校のたすきの重みと仲間への思いだけで動かない体を動かしてゴールまでたどり着いたのだと考えると、今年も胸が締め付けられる思いでした。その後は、美味しいお酒で駅伝談義、今年結婚する甥っ子の話題、夕方は家で11人カラオケをしてお開きという3日間でした。

毎年箱根駅伝を終えると、うまく走れた選手も失敗した選手も、一年間どんな思いで練習に耐えてきたのだろうと考えます。一年後の正月を目指して、1月4日から練習を始める各大学。シード権のある10大学は計画が立てられますが、ほとんどの大学は10月に昭和記念公園で行われる予選会に向けて準備をします。ちなみに予選会に出るためには、10名以上の選手全員が5000m16分30秒以内または10000m34分以内であることが条件であるため、どの大学でも参加できるという訳ではありません。厳しい条件に打ち勝って出場権を得てようやく正月を迎え、本番の箱根ではさらに厳しい戦いをするわけです。たすきをつなぎたい、シード権を取りたいという思いだけで、なぜ人間は自分の限界を超える走りができるのだろうと考えさせられます。人間の能力ってどれだけあるのだろうと思うのが、毎年正月の恒例です。

私たちは日常の生活の中で、そこまで追い込まれる自分を感じることもあるだろうか。自分の能力の限界に挑戦しているだろうか。年を重ねるごとに衰えを感じますが、箱根からもらったパワーを今年一年の自分の活力として、手を抜くことなく進んでいきたいと思っています。新しい年も、保護者・地域の皆様のご理解とご協力の下、さらに強い信頼を築けるよう精進して参ります。